

2026年4月12日（復活節第2主日、A年）

メッセージ

「見ないのに信じる」

（ヨハネによる福音書20:19-31）

司祭ヨセフ太田信三

ご復活のイエスが弟子たちに前に現れた時、トマスはそこにいませんでした。それを知ったトマスは、まるで悔しがる子どものように頑なになり、「傷を見るまでは信じない」と言いました。トマスはなぜ頑なになってしまったのでしょうか。それは、トマスが他の弟子たちがご復活のイエスに会ったことが羨ましくてたまらなかったからではないでしょうか。トマスは、不信仰だと咎められるものかもしれませんが、トマスのように素直に、嫉妬して、ふてくされるほどにイエスを求める、それもまた信仰者の尊い姿に思えます。何よりも、私たちはトマスがいてくれたおかげで、イエスの優しさを知ることができます。傷を見るまで信じないと言ったトマスにもイエスは現れ、ご自分の傷に触れるようにと声をかけてくださいました。ここにイエスの深い愛を感じます。その愛を受けたからこそ、トマスは傷に触れるまでもなく、「わたしの主、わたしの神よ」と、イエスを「神」と信仰告白したのです。これは、それまでどの弟子たちもできなかった信仰告白です。トマスは疑いました。しかし、疑いの先にイエスに出会い、その愛に触れ、イエスへの深い信仰へと導かれたのです。

「見ないのに信じる人は、幸いである。」この言葉は、トマスにだけ向けられた言葉では留まりません。この言葉は、イエスを直接目にすることができない今を生きる私たち、この言葉を聴くすべての者に向かって語られています。「見えなくとも、わたしはあなた方と必ず共にいる。そのことを信じなさい」とイエスは仰っているのです。イエスがはじめに弟子たちに現れたのも、そしてトマスに現れたのも「週の初めの日」、つまり日曜日でした。私たちは毎週、その日曜日に主の復活を祝って礼拝をささげています。この主日にあつて、あらためてトマスに訪れたイエスの愛の出来事を自らに感じたいと思います。イエスは閉じられた戸も超えて弟子たちのなかに立たれたように、「あなたがたに平和があるように」と、私たち一人ひとりを祝福し、私たち一人ひとりにも神の息吹を注いでくださっています。そして、私たちが疑おうとも、近づいてきてくださるのが主イエスです。今、あらためてイエスのその深い愛に触れ、弟子たちのように新しい命に与りたいと願います。そして、トマスが変えられたように、この復活節、私たちが「見ないのに信じる」幸いな者とされますように。